

内山英保編輯 和漢アンソロジー『冬柏山房抄』の意義

— 与謝野寛・晶子と鎌倉文学サロン —

西村 富美子

『冬柏山房抄』は与謝野寛・晶子夫妻の主筆する「冬柏」の同人であった内山英保自身が編纂刊行したものである。^{①②}

発行年月日は「昭和十年十月十日」1935、発行所は越山荘と記され、「越山荘」の名は内山氏の出身地の石川県に由来するもので、「越山」は内山氏の号であり、内山氏の鎌倉にあった山荘である。

『冬柏山房抄』の「冬柏山房」とは、内山氏が大正十三年1924から住んでいた鎌倉の笹目から大正十五年1926に同じ鎌倉の千葉ヶ谷（御成町）に居を移し、この山荘の荘内の山頂に建てた書斎の名称であり、命名者は内山氏の短歌の師、与謝野寛であった。^③

越山荘の主、内山英保は新詩社のなかでは異色の学歴、経歴（前歴）の持ち主であったと言える。社会に出て後、人生の大半を実業家として過ごしたその交流関係は極めて広く、著名な政財界人、文化人等があり、それらの人々をこの「冬柏山房」に招いて交流を重ねた。

当時こうした「越山荘」のような別荘・山荘を所有する人物たちの文化的な交流は盛んで、尾崎罌堂の「莫哀山荘」（軽井沢）、島谷亮輔の「抛書山荘」、吉井彦太郎の「五松山荘」（伊豆）、また信楽真純の「一行荘」（鞍馬寺）など、歌会や俳句等の会合が催されその席で漢詩等も作られた。与謝野夫妻は特に「冬柏」時代にこうした山荘を訪れて同人達との歌会を主宰している。^④

先に『冬柏山房抄』の特色を簡単に挙げておくと、編纂者の内

内山英保編輯 和漢アンソロジー『冬柏山房抄』の意義

山氏は、学歴（教育系・芸術系）、職歴（原合名会社社員、絹織物輸出会社創業者、原三溪の傘下に再参加、横浜銀行等への転身）、及び作歌歴（実業界引退をして鎌倉に転居後、年齢は五十九歳ごろ〜七十三歳ごろ）までの特殊な経歴の持ち主である。また編纂した『冬柏山房抄』の内容についても、約百人の執筆者数また一千篇を越す作品数、及び漢詩・漢文・短歌・俳句・散文・絵画等の多岐にわたる作品の分野であり、真にアンソロジーというに相応しい。中で内山氏の短歌は約五百首（歌題は約百）を占める。

更に顕著なのは執筆者の顔ぶれであろう。著名な人物を挙げておけば、与謝野寛・晶子以外に、政治家の尾崎罌堂、実業家の原三溪、歌人の吉井勇・佐々木信綱・平野万里・土屋文明・森田草平・吉野秀雄、画家の津田青楓・有島生馬・石井柏亭・正宗得三郎・三宅克己、文学者の徳富蘇峰・久米正雄・堀口大学・高野辰之、俳人の荻原井泉水、高浜虚子、僧侶の信楽真純、菅原曇華等々、各界の錚々たるメンバーが名を連ねている。

内山氏の短歌の師であった与謝野夫妻の作品は内山氏に次いで多く、寛は、散文一篇・短歌六五首・漢詩一篇、晶子は、散文四篇・短歌五五首を収める。

○冬柏山房の主、内山英保について

先に『冬柏山房抄』及び編者の内山英保について概略を述べたが、内山英保についても少し詳細に記しておくことにしたい。

明治元年1868に生まれ、昭和二十年1945に没しており、その生卒はある意味で記念すべきものがある。石川県出身で、新潟県師範学校（新潟大学教育学部）、共立学校（開成高校）、音楽取調掛（東京芸術大学音楽部）で学び、明治三十四年1901に大実業家の原三溪と出会い、原合名会社に入ったが三年で退社する。故郷金沢で絹織物輸出の会社を創業するが、四十二年1908に再度原三溪の傘下の会社、また横浜興信銀行（横浜銀行）などの企業経営に参画した。

大正一三年1924に鎌倉の笹目に転居し療養生活に入る、五五歳。大正一五年1926に千葉ヶ谷に転居、邸内に書斎棟「冬柏山房」を建て文化人、及び鎌倉在住の文化人と盛んに交流をし、同時に歌人としての作歌活動を開始しており、与謝野夫妻も「越山荘」を何度か訪れている。

昭和十年1935に『冬柏山房抄』を刊行すると同時に、雑誌「山房消息」を創刊、一七年1942までに六五号を発行した。与謝野夫妻との接点がいっ頃から、またその門下に入ったのはいつ頃か正確には分からないが、すでに述べたように、当時の新詩社の同人誌「明星」（第二次）の第一〇巻第一号「新年号」（大正一五年二月二〇日刊行）に初めて短歌「真珠抄」一二首が掲載されているので、英保が鎌倉に転居したころが交流の最初ではなかったかと考えられる。英保が五七歳の時である。翌年（昭和二年）四月に「函山冬景」一五首が掲載され（第一〇巻第二号）るが、「明星」第二次への投稿はこの二回に止まる。なお同年九月に「明星」第二次は終刊となるが、その後新詩社の新し

い同人誌『冬柏』の発刊（昭和五年1930）とともに、同誌への短歌の投稿を開始している。

○『冬柏山房抄』について

ここで、改めて『冬柏山房抄』の内容を述べておくならば、総ページ数二〇四頁、

扉絵は彩色画の椿の花（有島生馬作）。

英保の自序「山を愛する心数則」（日付：昭和十年六月二十三日）、末尾に「鎌倉は七百年は夢ならで命つづけりこの木の草」の一首。また「冬柏山房抄刊行の辞」に、収録した短歌について

一切心の趣くままに自選し、而も、中には与謝野夫妻先生加筆を得ざりしもの亦勘からざるを以て、其杜撰なるは夫妻先生の全く与りたまはざる所なることを特に明記す。昭和十年七月二十三日と記している。

写真（白黒・カラー）による作品を随処に配し、作品は「歌題」のもとに整然と構成され、各頁は上・下二段組みで、英保の作品を大凡は下段に配列する。

そして最後尾は内山英保氏の寛に捧げた哀悼の文の後に、

挽歌集の「師を哭く」があり、

昭和十年四月四日 墓前に 門下 英保

で終わる。

作者は百人に近く、各界の著名人、また新詩社の同人等、すでに挙げたような人物が名を連ねる。

以上、『冬柏山房抄』及び「冬柏山房」の主、内山英保について述べてきたが、次に『冬柏山房抄』には、二つの重要なイベントがあり、このイベントを中心として『冬柏山房抄』は編輯されたものであることについて記しておきたい。

○「冬柏山房」の二つのイベント

『冬柏山房抄』には内山氏が最大の重点をおいた二つのイベントがあり、実に詳細に記述されている。それは、

一、昭和九年五月十一日

二、昭和十年正月四日の集

である。先ず、一、について、『冬柏山房抄』は、石井柏亭の「菁莪」の色彩画（写真版）と共に、次のように記す。（当日の歌題も「菁莪」であつたのではないか）

昭和九年五月十一日雅会を越山荘に催す。罌堂尾崎先生を主賓とし、与謝野先生夫妻、有島生馬、石井柏亭、正宗得三郎、津田青楓、堀口大学、近江満子、森杏奴、石井龍男、信楽真純、井上苔溪、田中梯六、菅沼宗四郎、関戸信次、諸氏来り会す。当日の作品は歌題、画題、共に荘の事物ならざる莫し。茲に輯めて以て冬柏山房抄に加う。

と、主賓の尾崎罌堂、師の与謝野夫妻、以下十三人の名を記している。これと同じ内容の記事が、『与謝野寛年譜』及び『冬柏』に見える。

五月十一日、内山英保の招請あり、罌堂翁を主賓として、諸友冬柏山房に集まり、のち席を香風園に移す。会する者……（略）……

（『与謝野寛年譜』昭和九年）

五月十一日の午前から、鎌倉の内山英保氏の招請に由り、尾崎行雄先生を主賓として、諸友が内山氏の冬柏山房に集まり、夜は同地の香風園に席を移して饗を受けた。会する者は、尾崎先生の外、……（略）……

（『冬柏』消息欄。第五卷第六号、昭和九年五月二十八日発行）
この日の会合が、与謝野夫妻、また新詩社の同人たちにとっても大

内山英保編輯 和漢アンソロジー『冬柏山房抄』の意義

イベントであつたことが分かる。

※なお当日の参加者の短歌群の前に、

罌堂自筆の書「心静奥長」（題辭）、

与謝野夫妻自筆（短歌、双幅）（色紙）、

罌堂自筆 短歌二首 正宗得三郎自筆色彩画 鉄線の花

有島生馬自筆 短歌 石井柏亭・有島生馬自筆 短歌

津田青楓自筆 短歌二首 津田青楓自筆色彩画 あやめ

石井柏亭自筆 短歌 堀口大学自筆 短歌

正宗得三郎・晶子自筆 画・短歌、

寛自筆 短歌三首 晶子自筆 短歌二首

と右のような作品、総べて写真版が掲載され、当日の参加者十三人の短歌群へと続いていき、最後尾には、

「尾崎先生を迎えて」の歌題の英保の短歌十三首の連作を載せ、最後に出席者の写真が添えられている。

次に、二、については、先ず最初の頁の upper 段に、広川松五郎の色彩画「椿の樹」、下段に「昭和十年正月四日集」の題のもとに、当日の集の参加者の名を記す。

椿の樹 松五

短歌と書 寛 晶子

短歌 寛 晶子 罌堂 生馬 柏亭 梯六 宗四郎 信次

満子 英保

散文 晶子 秋骨

（このうち、松五（松川広五郎）の画と、寛・晶子の「短歌と書」は写真版）

やはり、これと同じような内容の記事が、『冬柏山房抄』及び『冬柏』に見える。

四日、正午近くなつて有島生馬先生が葉山から、戸川秋骨先生と掛

貝芳男、関戸信次二氏が東京から、近江夫人が熱海から、菅沼宗四郎氏が横浜から訪ねて来られた。午後其等の諸氏と一緒に千葉が谷の冬柏山房の歌会に出席した。山房の内山氏は夫人が微恙で籠っていられるに聞わらず、旧臘来の予定の如く此会を催された。来会者は外に尾崎弔堂、石井柏亭両先生と田中悌六、桑野信子二氏であった。

『冬柏山房抄』鎌倉日記の数節・晶子。『冬柏山房抄』に記された以外の出席者は、掛貝芳男・桑野信子

啓上、一月四日の会（内山氏の山房）には、午前より海浜ホテルへお出で下されたく候。

（『鉄幹と晶子』「寛の封書」十二月二十八日付）

『冬柏山房抄』に記された以外の出席者に、得三郎（正宗）、苔溪（井上）、辻夫人の名が記されている。

*「鎌倉詠草」（出席者）、「鎌倉日記」（晶子）

（『冬柏』第六巻第二号、昭和十年一月二十八日発行）

この二つのイベントは、一、は尾崎弔堂が主賓で、二、は与謝野夫妻が主であったが（弔堂も出席はしている）、写真版の挿入の数、出席者と短歌の数から見て、前者の一、のほうが、内山氏にとっての最大イベントであったと思われる。（晶子・戸川秋骨による散文二篇が加えられたことは後者一、の特徴）

ただ共通しているのは、尾崎弔堂が特別来賓であったことで、弔堂自身の短歌の掲載数、また英保及び与謝野夫妻の弔堂に対する敬意が随処に見られることである。

この二つが、内山英保の作歌生活の最大最終の集大成の意味を持つイベントであったことは確かであろう。昭和九年、十年をピークとして、内山氏の短歌創作の意欲が急激に衰退していくことも関係があるように思われる。短歌の師、与謝野寛が『冬柏山房抄』刊行の二ヶ月後に亡くなったことも要因であったのだろう。

○「冬柏」の名称

「冬柏山房」の命名者が与謝野寛であることは明白だが、命名の時期が何時であったのかは不明確である。

「冬柏山房」の「冬柏」の名は昭和五年前後に突如として頻りに登場する。「冬柏山房」以外に、同人誌の再々刊として『冬柏』の創刊、与謝野夫妻の住まいに晶子の五十歳の誕辰を記念して贈られた書齋に「冬柏亭」と命名されたこと、さらに晶子の「冬柏」の花の愛好等々、短期間の間の登場である。

このように「冬柏」の名が一時頻りに用いられたのだが、「冬柏」という名についての問題は未だに議論の余地が残されている。そこで現時点で分かっている範囲内で、論究ではないが整理解説をしておく。明確な結論は今後の課題である。

「冬柏山房」内山英保の山荘の書齋を「冬柏山房」と名づけたのは与謝野寛であり、先述したように正確な時期は分からないが、命名の事実は幾つかの記述によって明らかである。例えば、

*『冬柏山房抄』『冬柏山房の記』…与謝野寛（昭和十年一月末）

鎌倉なる千葉が谷と佐介が谷の境する山に、我が友内山英保ぬしの家あり。その家四つの所に別れて建てり。……略……

書齋に入れば、浄机あり、炉あり、棚に古書の数巻を重ね、壁に禅家の一軸を懸けて、白き一枝の花を瓶に挿せり。この書齋を、あるじが冬柏山房と名づけたるは、山に自生の椿多くして、冬より春に及ぶまで花を絶たず、枝にある、地に散れる、共に主の愛する所にして、おのれ寛の早く考証したる国語の「つばき」の語原が、漢語の「冬柏」の古音「*Tsu-Pak*」の転音なることに由りぬ。……略……これは客間にして、越山荘と名づけたるは、あるじの郷国なる越後にちなめるなり。……略……

かく四つの所に分かれたる家ども、何れも清素にして優雅の趣を兼ね、季節毎に木草の花あり、

*『同書』「冬柏亭雜記の一節」…与謝野晶子（昭和五年四月）

花の無い冬から春に亘って久しい盛りを見せる花として私は椿が好きである。震災前の正月に熱海から初島へ船を仕立てて椿の花を見に行った事もあった。近年鎌倉の内山英保さんの扇が谷の山荘に野生の椿の多いのを見て羨ましく思っていると、郊外の庭へ友人達がよく花を持つ椿の老木を植えて下さったのは嬉しい事であった。：（晶子誕辰…昭和四年十二月）…其の夜友人達の間に同人雑誌を再興する議の生じたのが本で、平野万里さんを編輯主任に推し、この四月（昭和五年）に初号を発行したが、其の題号も椿にちなんで「冬柏」と附けられた。良人の考証に由ると「ツバキ」の語原が支那語の「冬柏」の古音「ツバク」に本づくからである。朝鮮でも現に此木を「ツンダバク」と云い、字には「冬柏」と書いている。この考証に由って「昨年（昭和三年？）既に内山さんの鎌倉の山荘が「冬柏山房」と命名せられているのである。それからまた私の誕辰を記念して先輩と友人から旧臘私に日本風の書斎を贈って頂いたが、その新築が此の四月に雑誌の発行と同じ頃に出来上がった。六畳と三畳と二室の書斎である。私は是れに「冬柏亭」と云う名を附けて、南側に新しく紅白両樹の椿を植えた。旧臘の椿の花の宴より引きつづく師友の御厚情を永く記念し、その感激の中に読書もし筆をも執っていたい為である。

*『同書』「鎌倉日記の数節」…与謝野晶子（昭和十年一月四日）

…内山氏のお宅は千葉が谷の山を占めて、山下に母屋と越山荘があり、山上に茶室風の冬柏山房がある。氏が十年前に此处に移られて以来、私達の訪問することしばしばである。氏は此山の自然を

内山英保編輯 和漢アンソロジー『冬柏山房抄』の意義

破壊しないようにして幾筋かの径を造り、清明台、滄浪台、望岳台、などの展望台を設け、山中の一木一草をも四季の好友として愛護せられている。鎌倉には山に倚って大社、名刹、邸宅が少なくない。氏のお宅は其れに比べてつましやかなものであるけれども、清素にして幽雅な趣致を満たしている。老いて足ることを知るの尊いと云うが、誠に氏の如きは足ることを知る一人であらう。

*「日本語原考三十」…与謝野寛（『明星』第二次…昭和二年四月）
「ツバキ」（椿）は「冬柏」の古音「Tsū-Pak」が「Tsū-Pak」と転じた語。「翠柏」、「春柏」、「叢柏」とも書き、共に同じ古音を持っている。義は冬の日も緑なる柏の一種なるが故に称する。「柏」は常緑の喬木に亘って広く用いる古称である。予は「ツバキ」の語原を探るに久しく苦しんだ。然るに計らずも朝鮮の丁茶山が著した「雅言覺非」（朝鮮研究叢書第五卷）に「ツバキ」を「冬柏」と呼び、「翠柏」、「春柏」、「叢柏」とも呼ぶことを知り、支那の古語が我国にも彼国にも保存せられている事を知った。「ツバキ」は「山茶」の一種であるが、丁茶山は「酉陽雜俎」に「山茶は高さ丈余、花の大きさに盈ち色は緋の如く、十二月に開く」とあるを引き、また東坡の山茶の詩に「葉厚有_レ犀稜角健、花深少_レ態鶴頭丹」及び「爛紅如_レ火、雪中開_レ」とある句を引いて説明している。我国では山茶花と「ツバキ」とを久しく区別している。

*『冬柏』消息欄 第二卷第一号、昭和五年十二月二十五日

「冬柏」は巻を改めると共に表紙の図案を前と同じく広川松五郎さんが書かれました。それから柏亭先生のスケッチ一題の外に梅原龍三郎先生から寄せられた三題のスケッチの内二題を本号に挟みました。あとの一題は次号に挟みます。序でに書き添えますが、「冬柏」を何と読むかというお問合せを各地から受けます。これは国語の

内山英保編輯 和漢アンソロジー『冬柏山房抄』の意義

「ツバキ」(椿)の語原の字で「トウハク」と読んでいます。柏亭先生から承りますと朝鮮には「冬柏島」と云う島もある相です。朝鮮では現に「ツング・バク」と読んで我國の椿に当る言葉です。

以上挙げた記事を整理しておけば、

「冬柏山房」 「冬柏山房の記」・「冬柏亭雜記の一節」

「鎌倉日記の数節」

「冬柏」 「冬柏山房の記」・「冬柏亭雜記の一節」

「鎌倉日記の数節」・「日本語原考三十」

「冬柏」(雑誌) 「冬柏亭雜記の一節」・「冬柏」第二巻・第一号

「冬柏亭」 「冬柏亭雜記の一節」

「冬柏山房」の命名、晶子の「冬柏亭」の完成、雑誌『冬柏』の創刊、と昭和三年・四年・五年と連続しており、「冬柏」の名称に対する強い愛着が感じられる。ただこの一連の「冬柏」のルーツは、「冬柏」が「つばきの花」であることであり、その論拠は「日本語原考」の「つばき」説なのである。これには、言語学・植物学等の関連もあり、単純には結論を得られそうにない。

「冬柏」の中国の古音が「Tsu-Pak」「Tu-Puk」に「Tsu-Baki」と転じたのか。韓国では「冬柏」は「ツバキ」のことなのか。「ツバキ」は「山茶」の一種なのか。韓国では「ツバキ」を「ツング・バク」と言い、「冬柏」の字を当て、「冬柏島」という「つばき」の島がある。これらの説に対しては、現在ではやはり結論しがたいというのが実状である。

所謂「椿」は、中国では「つばき」ではなく別の植物で、「山茶」は中国にもあり、日本と同じく「サザンカ」(山茶花)で中国渡来の植物であり、山茶花はツバキ科に属する。漢字を用いない韓国で「冬柏島」が「つばき」の名所と言えるかどうか、(ちなみに韓国語では「ツング・バク・ソオ」といった諸説のみを今回は提起しておく。筆者も考えるところはあるのだが稿を改めたい。

○『冬柏山房抄』の漢詩漢文の作品

『冬柏山房抄』は約一千首の短歌等を収めているが、その数は極めて僅少だが十五人の作者の漢詩漢文の作品二十二篇を収録している。数量的には問題にならないのだが本書の中では異彩を放つ存在である。それらの作品が作者の直筆で、紙材が紙箋・色紙・条幅等で大半が写真版であり、『冬柏山房抄』を極めて豪華集とする一助をなしていることと、作者が短歌の世界とは無関係でありそれぞれの世界での著名人が名を連ねていることである。

編者の内山英保は歌人であり、本書も基本的には歌集である。筆者が興味を感じたのは、漢字の世界と仮名の世界の融合した独自の世界である。こうした異質の作品集を制作した内山英保の意図は何であったのか考えてみようと思ったのが、実はこの小論の出発点であり目的であった。論を進めるにあたって、先に本書所収の漢詩・漢文関係の作品を挙げておくことにしたい。『冬柏山房抄』の目次にしたがって、列記する。

- | | | | |
|---------|-----------|--------|------------|
| ①題辭 | 田辺新之助(松坡) | 四言一句 | 昭和八年夏 |
| ②山房路及題詩 | 原 富太郎(三溪) | 画・七言絶句 | |
| ③古語及書 | 荒井賢太郎(松陽) | 八句 | 昭和五年一月 |
| ④詩句及書 | 有吉忠一(成南) | 五言二句 | |
| ⑤漢詩及書 | 田辺新之助(松坡) | 五言古詩 | 昭和八年三月 |
| ⑥其二 | | 五言古詩 | 昭和八年三月 |
| ⑦漢詩及書 | 原 富太郎(三溪) | 七言絶句 | 昭和八年十月 |
| ⑧漢詩及書 | 上 真行(夢香) | 五言古詩 | 昭和五年・六年 |
| ⑨漢詩及書 | 堀口九萬一(長城) | 五言律詩 | 昭和八年九月十六日 |
| ⑩五言及書 | 有島生馬(雨東生) | 五言一句 | |
| ⑪漢詩及書 | 丸田尚一郎(苟完) | 七言絶句 | 昭和五年十二月十五日 |

⑫ 漢詩及書 頼母木桂吉(春陽) 五言絶句

⑬ 漢詩及書 高野 辰之(斑山) 七言絶句

⑭ 漢詩及書 菅原 時保(曇華) 七言絶句

⑮ 漢詩及書 与謝野 寛 七言律詩

⑯ 漢詩 飯塚彦治郎(鶴崖) 七言律詩

⑰ 漢文及書 飯塚彦治郎(鶴崖) 昭和四年十二月五日

⑱ 越山莊詞より 鈴木朔太郎(墨庵) 昭和四年十二月五日

⑲ 漢詩及書上 真行(夢香) 五言律詩

⑳ 漢詩三首 丸田尚一郎(苟完) 七言絶句三首

㉑ 絶句二首 上 真行(夢香) 七言絶句四首 昭和四年

絶句二首

㉒ 題辭及書 尾崎 行雄(号堂) 四言一句

○は号。⑯⑱⑲は印刷活字、他は自筆。なお制作時の分かるものは年日時を記した。

以下に作者の略歴を付したが不詳者は作品番号のみを記した。

①⑤⑥ 田辺新之助…漢詩人・書家・教育者。

②⑦ 原富太郎…実業家・美術収集家。

③ 荒井賢太郎…官僚・政治家。

④ 有吉忠一…官僚・政治家。

⑧⑨⑪⑫ 上真行…雅楽師・音楽家・漢詩人・書家。

⑨ 堀口九萬一…外交官・漢詩人・随筆家。

⑩ 有島生馬…画家・随筆家。

⑫ 頼母木桂吉…政治家・実業家。

⑬ 高野辰之…国文学者・作詞家。

⑭ 菅原時安…僧侶・鎌倉建長寺管長。

⑮ 与謝野寛…歌人・漢詩人。

⑲ 尾崎行雄…政治家・歌人・漢詩人。

⑳ 丸田尚一郎…?。㉑ 飯塚彦治郎…?。㉒ 鈴木朔太郎…?。

以上挙げた十五人の中から数篇を選んで少し解説をしておくことにする。

冬柏山房口吟

冬柏山房の口吟

原 富太郎

⑦

主人結屋園山頂 主人 屋を園山の頂に結び

秋入山溪林色紅 秋は山溪に入りて林色紅なり

枝上小禽馴相聴 枝上の小禽 馴にして相聴き

吟声為動白雲中 吟声 為に動く白雲の中

※昭和八年秋十月、冬柏山房での詩、自筆の作。七言絶句。冬柏山房からの山内の風景を詠じている。

(内山英保にとって大切な客人であるが、時に訪れることはあっても、他の人々と連れだつて歌会やイベントに出席することはなかったようである。書画を嗜んだが短歌の作はない。②は三溪の画に画賛体で書かれているが、⑦と詩の句に異同もあり、同時の作ではないだろう。この②は冬柏山房の代表的な作品である。

越山莊偶成

堀口九萬一

⑨

越山莊にて偶たま成る

解衣槃礴處 衣を解き 槃礴して処るに

瑟々万松鳴 瑟々として 万松鳴り

幽味留琴意 幽味 琴意を留め

微吟適酒情 微吟 酒情に適う

泉流潔如玉 泉流 潔きこと玉の如く

樹影大於城 樹影 城よりも大にして

鎮日無人過 鎮日 人の過ぎる無く

蕭然門巷清 蕭然として 門巷 清し

※昭和八年九月十六日越山莊での自筆の作、五言律詩。越山莊の山

内山英保編輯 和漢アンソロジー『冬柏山房抄』の意義

水の自然の風景、山荘の静寂な雰囲気のたたずまいを詠じる。

堀口九萬一は昭和八年九月十六日、前の原三溪は同年の十月、に訪れた時の作。両首ともに秋の山水の静寂で超世間的な雰囲気漂わせている。

堀口九萬一は、明星の同人堀口大学の父である。外交官であるが、与謝野寛の漢詩の友でもある。

頼母木春陽

⑫

楓林秋已老

楓林 秋已に老い

日暮影方疎

日暮 影方に疎なり

怪越山莊白

越山莊の白きを怪しむ

団々月上初

団々 月上ること初めなり

※詩題は無い。頼母木春陽は頼母木桂吉、政治家・ジャーナリスト。制作年時は不詳だが、季節は秋の初め。日が暮れて越山莊の楓林に上り始めた満月を詠じた五言絶句、自筆の書。新聞社の社長、自動車会社の子役、衆議院議員、立憲民政党幹事長等を歴任した政治家でもあった。

題越山莊

越山莊に題す 菅原時保

⑭

春花秋月又冬雪

春花 秋月 又た冬雪

風景四時風景新

風景 四時 風景新たなり

珍重越山真面目

珍重す 越山の真面目

笑迎歌客与詩人

笑って歌客と詩人を迎う

※制作年時は不明だが、越山莊で詠じた自筆の作、七言絶句。菅原時安は号曇華、臨済宗の僧で、鎌倉建長寺管長、英保とは親交があったのではないか。四季の季節が新鮮な越山莊、歌人また詩人を喜んで迎える主を詠じている。禅宗の僧侶らしい簡潔また独特の表現を感じさせる。

与謝野 寛 ⑮

冬柏満山花自紅

冬柏山に満ち 花自ずから紅なり

一溪深處訪詩翁

一溪深き処 詩翁を訪う

徑廻崖腹行望海

徑は崖腹を廻り 行きて海を望み

亭占林梢坐聽風

亭は林梢を占め 坐して風を聴く

春月照軒姑代燭

春月 軒を照らして姑らく燭に代え

主人煎茗不須童

主人茗を煎じるに童を須いず

成句唱和怡然笑

句成って唱和し 怡然として笑う

声は帰雲揺曳中

声は帰雲揺曳の中に在り

※浜久雄『全釈与謝野鉄幹詩』(『遥青書屋詩稿』)には①「鎌倉冬柏山房小集呈主人」の詩題があり二首を載せる。、『冬柏』第五卷第一号(昭和八年十二月二十八日発行)には「冬柏山房小集席上作」の詩題がある。制作の時期は不詳だが、季節は春。昭和五年以降の作であろう。なお『遥青書屋詩稿』と、『冬柏』『冬柏山房抄』では第七句に異同があり、前者は「更闌唱和哄然笑」とする。冬柏山房を囲む山々の満開の冬柏(つばき)の紅い花が咲きみだれ、月光のもとで主人自ら茶のもとをなしをし、できあがった詩句を唱和し和やかな雰囲気なかで談笑する声がたなびく雲に消えてゆく光景を詠じている。内山氏の短歌の師、寛が弟子のために短歌以外に漢詩を贈ったのである。

(老人会)

上 夢香

⑯

同声旧侶氣如蘭

同声の旧侶 氣 蘭の如し

重倚湘莊白玉欄

重ねて湘莊の白玉欄に倚る

咫尺仙山送濃翠

咫尺の仙山 濃翠を送り

鬢辺不覺二毛寒

鬢辺 二毛の寒きを覺えず

名遂功成無個憂

名遂げ功成りて 個憂無し

十人襟宇太清修 十人の襟宇 太だ清修

壮齡鼓瑟四軒寺 壮齡鼓瑟 四軒寺

還曆飛鴈百尺樓 還曆 飛鴈す 百尺の樓

同声会員の還曆の宴集に二首を賦し、以て此の日を賀す。会する者、幸田女史以下総べて十名、皆な楽壇の先覚なり

夢香、病夫真行

※内山英保は今の東京芸大の出身でもあり、上真行は師にあたり後に東京芸大教授を勤めた。雅楽師の家系、チェロ奏者でもあったが漢詩人でもあった。内山英保が越山荘で十人の同窓生と還暦同窓会を催した時に、高齢で病氣のため出席できなかった上真行が贈ったもの。昭和七年六月十二日。越山荘の超世俗的な環境の中で、音楽の世界で活躍する教え子たちの還暦会を祝した七言絶句二首。

序でながら、其日郷家に命じ越の海にて漁れた鯛を雪詰めにして上、乗杉の両先生へ拝送させた所、上先生からは同時に左の二首をも与えられたから、之を併記して筆を擱く。(乗杉、上先生ともに音楽大学での英保の恩師)。

北海波揺首夏風 北海の波 首夏の風を揺らし ②①

此魚遊泳色殊紅 此に遊泳する魚 色殊に紅なり

高情重又忝嘉脱 高情重ねて又た嘉脱を忝くす

飲湧貧翁庖屋中 飲は湧く 貧翁庖屋の中

厨女執刀斜照餘 厨女刀を執りて 斜照余し ②①

擊鮮成膾悦伊予 鮮を撃ちて膾を成し 伊予を悦ぶ

都門所鷺無斯美 都門 鷺ぐ所 斯の美無し

紅鰓欺花三尺魚 紅鰓 花を欺く 三尺の魚

※当日欠席の二人の恩師に、内山英保が故郷石川の実家から雪詰めにして送った鯛の贈り物に対して、上真行から追贈された謝意の漢詩

内山英保編輯 和漢アンソロジー『冬柏山房抄』の意義

二首。

上真行は多彩な才能の芸術家で、和洋の音楽に通じ、漢詩人また書家でもあり、内山英保の尊敬する芸術面の師であった。

○ 『冬柏山房抄』は、やはり和漢の両分野にわたる詞華集である。その特殊な内容は、編者である内山英保の強烈かつ緻密な意図が秘められていたことを感じさせる。作品のジャンルの広さ、作者の範囲の広さには、違和感を覚えるほどの特異な選択がなされている。その選択は短歌を中心とするにも関わらず、冒頭の部分を飾るのは大半が自筆の漢字の書であり画なのである。色彩を活かした作品の数が多いことは制作費無視の贅沢な書物の印象を与えるが、編輯を自身の手で行っているのは自らの人生の集大成の事業と考えていたのではないだろうか。

実業家として人生の大半を過ごし晩年に至って還暦以後の見事なまでに徹底した作歌活動への転身は、内山英保の心底の哲学の転向を意味するものであり、『冬柏山房抄』の評価すべき点はこの辺にあると推察し、『冬柏』の名称の問題とともに『冬柏山房抄』以後の内山英保の動向について考察することを課題としたいと考える。

〔注〕

(1) 英保が新詩社の同人になった時期については明確でないが、新詩社の『明星』第二次、及び『与謝野寛年譜』(与謝野光編)によって推測すれば、

○真珠抄十二首(『明星』第二次・第十卷第一号…大正十五年十二月二十日発行)

○昭和二年1927、箱根小涌谷にて新年を迎う。同行は平野万里・関戸信次二君と晶子なり。後れて有島生馬・内山英保二君来たり会す。(『与謝野寛年譜』)

内山英保編輯 和漢アンソロジー『冬柏山房抄』の意義

○今年(昭和二年)の正月元旦から平野万里君と自分達夫婦とが先ず箱根小涌谷の三河屋に行き、翌日に関戸信次君、三日に有島生馬君と内山英保君とが来られ、有島、内山二君は一泊して帰られたが、他は五日まで滞在した。其時の詠草が此号の「函山冬景」である。(『明星』第二次・第十卷第二号・一隅の卓・昭和二年四月一日発行。)なお「函山冬景」は同号に掲載、十五首連作。

※以上のことから、同人となつたのは鎌倉に転居した大正十五年1926ごろかと推測される。

(2) 印刷者は鈴木越武、印刷所は明章印刷所。鈴木氏は『冬柏』の同人、「明章印刷所」は『冬柏』と同じ印刷所である。

(3) 「鎌倉なる千葉が谷と佐介が谷の境する山に、我が友内山英保ぬしの家あり、その家、四つの所に分かれて建てり。……書斎に入れば、浄几あり、爐あり、棚に古書の数巻を重ね、壁に禪家の一軸を懸けて、白き一枝の花を瓶に挿せり。この書斎をあるじが冬柏山房と名づけたるは、山に自生の椿多くして、冬より春に及ぶまで花を絶たず、枝にある、地に散れる、共にあるじの愛する所にして、おのれ寛の早く考証したる国語の「つばき」の語原が、漢語の「冬柏」の古音「Fay」の転音なることに由りぬ。」(『冬柏山房抄』『冬柏山房の記』寛)。命名の期日については不詳。

(4) 昭和七年1932には、一月に有賀精の「真珠庵」(吉浜)、二月に岡崎よね子の「長生荘」(伊東)、島谷亮の「抛書山荘」(一碧湖)、七月に山本直良の「久如園」(軽井沢)、九月に内山英保の「冬柏山房」(鎌倉)、十一月に信楽真純の「二行荘」(京都鞍馬寺)、昭和八年一月に吉井彦太郎の「五松山荘」(伊豆)等。(『与謝野寛年譜』)

(5) 散文には、「冬柏山房の記」与謝野寛。(日付…昭和十年一月末)。「山莊懷古」有島生馬。「山房小集の記」佐藤保。「雑木の花(上)より」与謝野晶子。「雑木の花(下)より」与謝野晶子。「冬柏亭雑記の一節」与謝野晶子。「還暦互祝の記」英保。「鎌倉日記の数節」与謝野

晶子。「鎌倉今昔の感」戸川秋骨。「有名と無名(上)」英保。「有名と無名(下)」英保。等がある。

(6) 三溪は号、原富太郎。本名は青木富太郎。岐阜県出身で、実業家また茶人。横浜の豪商、原善三郎の婿養子となった。富岡製糸工場を三井家から譲り受け帝國蚕糸社長、また横浜銀行頭取となった。三溪園(横浜市中区、義父善三郎氏の別荘)を造り、全国の古建築を移築し戦後横浜市に譲渡。明治三十五年1902ごろから別荘地を本宅として造園、明治三十九年1906に開園公開、百年を経て平成十九年2007に国の名勝地に指定された。

(6) 内山英保は、明治の初めに生まれ、太平洋戦争終戦の年の二ヶ月前、六月に亡くなる。明治・大正・昭和の三代を生きた波瀾万丈の生涯であり、享年七十七歳。

(7)

*①昭和三年十二月二日 「内山老兄のお宅にて冬柏会を催され候由につき、お差繰り下され彼地へお出懸いかげや。」(与謝野寛から菅沼宗四郎宛の書簡・「鉄幹と晶子」)。「昭和三年十二月二日、薄時雨して寒い日だった。俗事二件を片づけて鎌倉へ出かける。十一時十二分、与謝野氏夫妻と平野万里氏を駅に迎えて扇が谷越山荘内山英保氏方に至る。主人は既に山上の冬柏山房に入って高浜虚子、荻原井泉水両氏と対談中であつた。……越山荘へ引き返したのが午後三時頃、帝大生の田中悌六氏が待ちかねて居られた。これから冬柏会第六回例会に移って歌作に耽る。遅ればせに関戸信次氏も見える。」(『冬柏山房抄』『山房小集の記』)

*②昭和五年三月二十七日 「三月二十七日に、与謝野先生御夫妻、内山、関戸二氏、近江、桑野二夫人、掛貝君と私とで葉山へ行った。途中、鎌倉の内山氏の冬柏山房へ寄ったが、楓の若葉など既に初夏の趣で、一同を驚かした。」(『冬柏』『消息』第一巻・第二号)

*③昭和五年十二月七日 「十二月七日の日曜に横浜短歌会の例会が

鎌倉の冬柏山房で催され、東京から井上苔溪、掛貝芳男、田中悌六、上田美津子、北川恵礎子四氏と共に私達夫妻が参会した。『冬柏』

「消息」第二巻・第一号

*④昭和六年五月二十四日 「わたくしと妻とは四月二十日から卅一日まで、鎌倉姥ヶ谷の「松の屋敷」に滞在した。有島生馬氏の別荘である。……「松の屋敷」の外、内山氏の冬柏山房、香風園、野間氏宅等で歌を詠んだ。」「冬柏」「消息」第二巻・第六巻

*⑤昭和七年九月 「九月、鎌倉なる内山英保氏の冬柏山房を晶子と共に訪い、一泊す。」「与謝野寛年譜」。「鎌倉の一夜」(一)・(二)『冬柏』第三巻第十一号。「前週の日曜日に横浜短歌会の例会が鎌倉の冬柏山房で催された。」「冬柏山房抄」「鎌倉の一日」(晶子)。

*⑥昭和七年九月三日 「昭和七年九月三日来荘の与謝野両先生に近江・高橋・辻の三夫人を加えて鎌倉山に出遊せる折の歌。」「冬柏山房抄」

*⑦昭和九年五月十一日。

*⑧昭和十年一月四日。

※与謝野夫妻が初めて内山邸を訪れたのは、昭和三年十二月ではないだろうか。『冬柏』創刊以前なのでこの冬柏会の「冬柏」は「冬柏山房」をさすと思われる。

(8) 内山氏の『明星』第二次及び『冬柏』への短歌の投稿は、

「明星第二次」(二七首)

①真珠抄 十巻・一号「新年号」大正十五年十二月二十日発行 一二首

②函山冬景その五 十巻・二号 昭和二年四月一日発行 一五首

「冬柏」(二〇七首)

①山居雜詠 一巻・一号 昭和五年三月二三日発行 八首

②山房雜詠 一巻・二号 昭和五年四月二三日発行 九首

③山房雜詠 一巻・三号 昭和五年五月十八日発行 一九首

④冬柏山房抄 一巻・四号 昭和五年六月二三日発行 一九首

内山英保編輯 和漢アンソロジー『冬柏山房抄』の意義

⑤山房雜詠 一巻・五号 昭和五年七月二五日発行 一九首

⑥冬柏山房抄 一巻・六号 昭和五年八月二五日発行 一九首

⑦冬柏山房抄 一巻・七号 昭和五年九月二五日発行 一九首

⑧冬柏山房抄 一巻・八号 昭和五年十月二五日発行 一九首

⑨冬柏山房抄 一巻・九号 昭和五年十一月二五日発行 一九首

⑩冬柏山房抄 二巻・一号 昭和五年十二月二五日発行 九首

⑪鎌倉詠草(六) 二巻・六号 昭和六年五月二五日発行 三九首

⑫刀水遊草 二巻・八号 昭和六年七月二五日発行 九首

(9) 冒頭の「冬柏山房記」執筆の二ヶ月後、三月末の二十六日に寛は亡くなる。内山氏は、この「冬柏山房記」が寛の散文の絶筆だと記している。

(10) 略称の名は、「松五は広川松五郎、罌堂は尾崎罌堂、生馬は有島生馬、柏亭は石井柏亭、悌六は田中悌六、宗四郎は菅沼宗四郎、信次は関戸信次、満子は近江満子」等である。

(11) 一、の冒頭に、尾崎罌堂自詠の短歌九首、末尾に、英保の短歌「尾崎先生を迎えて」十首。また寛の「若葉して山光る日に主人先ず待ちて歌あり我が大人のため」、晶子の「落葉焼く煙信濃の霧に似ぬ莫哀莊先生いませば」、石井龍男の「若葉より罌堂夫人とわが大人とまず出でたまう山かげの路」等。二、の冒頭の寛の歌に、「罌堂先生も来会せらる」と題した「御代のため重きを負える大人もまた我等と在れば歌いたまえり」他三首。罌堂自詠の短歌は一八首。

(12) 同人誌『冬柏』への投稿は昭和六年ごろが最終である。

(13) 命名の時期については、晶子の随筆の中の「一昨年」という記述が正確であれば、「昭和三年」ということになる。『冬柏山房抄』『冬柏山房抄』の一節「……与謝野晶子……昭和五年四月」現在はまだ未確認である。

(14) 唯一の例外は、尾崎(罌堂)行雄である。「冬柏山房」の扁額は罌堂の筆による。